



白桜小だより

平成 29 年度 12 月号
中野区立白桜小学校
校長 宇賀神 佳子
平成 29 年 11 月 30 日発行

できたらいいな・・・の実現

副校長 藤原 留美子

「大変だった・・・。色ぬりなどして、ていねいに仕上げられたと思う。戸棚もがんばった。「みかん」もがんばってリアルに仕上げた。」「6年生の家は、秘密基地というテーマに向かって、みんなで、いろいろなおもしろい物を作って楽しかったです。1組の内装はかっこよくてレベルが高いです。私達2組の内装もいろんな所に工夫があって、我ながら家の中に入ると落ち着くし楽しいです。」展覧会の共同作品「家」を作った6年生の感想です。図工専科の森 俊輔教諭は常々6年生の子供たちに、作品を完成させることだけが目的ではない、作品作りにどのように関わったのかが大事であることを述べています。つまり、作品の完成度の高さのみを求めているのではなく、児童が制作の過程で感性や想像力を働かせ、表したい物や事を、形・色などの造形的な視点で捉え、自分としての意味や価値を見出ししていくことを大事にしています。だからこそ「家を作った時、みんなでやったので一体感がありました。最後までやったので、できた時はすごくうれしかったです。そして、作っていて楽しかったです。」との感想になるのです。

先日、深夜のブックバラエティ番組に出演した漫画家の むぎわら しんたろうさんは、師匠である藤子・F・不二雄先生の教を自身の著書『ドラえもん物語～藤子・F・不二雄先生の背中～』から紹介されました。「のび太のねじ巻き都市冒険記」のペン入れを初めて任された時の事、戻ってきた原稿には、びっしりと「書棚はいかにものび太らしくー中略ーマンガ主体の不揃いな状態に」「部屋の隅に段ボールの箱 バット・グローブ・ロボットなどが見えている」等、先生からの書き込みがされていたそうです。そして「漫画家がベテランになると絵やアイデア創りのコツが解ってきます。この時が一番の危機なのです。十分に力を出しきらずにすませてしまう。こうなると、あっと言う間にマンネリの坂を転げ落ちることになります。漫画は一作一作、初心にかえって苦しんだり悩んだりしながら描くものです」とも。何度も失敗して描き直して、いつの間にか原稿はつぎはぎだらけ。それでもとにかく描き上げた原稿に書き込まれたたくさんの指示に「安心感があった。まるで先生から直接アドバイスをもらっているような気がした」そうです。決して手を抜くことなく、より良い作品作りに取り組まれた藤子・F・不二雄先生の意味は、藤子プロスタッフの皆さんに引き継がれ、映画ドラえもんは今年で37作目となりました。



今年の展覧会のテーマは「みんなでつくる展覧会」でした。「自分で決めること」「自分たちでつくりあげること」をキーワードに、作品づくりや展示作品選び、作品紹介などを通して、みんなでつくる展覧会を目指しました。「展覧会を作るのは、森先生だけではなく子供たちだけでもなく、みんなでやるのが大事だということが改めて分かりました。」の子供の感想からは、決して一人では成し得なかったことが、人と繋がり合うことで大きな力となって達成できた、そのためには、繋がる全ての人が、その役割や場所で精一杯輝くことが大切であることが分かります。

こんなこといいな、できたらいいな・・・の実現のために、子供たちのふしぎなポケットに入れておきたい大切な道具が、また一つできました。